

日本大地震

齋藤茂吉

青空文庫

西曆一九二三年九月三日。うすら寒く、朝から細かい雨が降つた。日の暮に [Spatenbrau] 《シユパーテンブロイ》 食堂の隅の方に行つてひとり寂しく夕ゆふさん餐をした。七月十九日にミュンヘンに著いて以来、教室では殆ど休なく為事しごとを励んだのであつたが、いまだに自ら住むべき部屋が極きまらない、極まりかけては南京虫に襲はれ襲はれしていまだに極まらずにゐる。それも教室の方の為事を休んで部屋を捜すのではないのは、つまり教室の方は縦たとひ一日の光陰をも惜しむがためであつた。けふも新聞の広告で見当を付けておいた数軒の部屋を見まはり、今夜は Klenze 《クレンツエ》 St. 《シユトラセ》 三十番地の部屋に寝泊りして虫の襲撃

を試すつもりである。

いつもなら二人の同胞がゐて食事を共にするのであるが、けふは都合があつたと見えて誰も来ない。まるい堅さうな顔をした娘が半立突リットルの麦酒ビールを運んで来て、しきりに愛想を云ふ。『ドクトルまだ恋をしたこと無い？』などといふことをいふ。『まだ無いね』などといふ。『けれど、シナでは十三四でもう結婚すると云ふぢやない？』『それは百姓どものことだ、僕のやうな学者は矢張り結婚はなかなかしないものだ』『さういふものなの？』『どうだ、恋をして日本へ行くか、Fujiyama 《フジヤマ》の国へ連れていかうか』『え、行きたいわ』などといふ会話をしたりする。さうすると幾らか気の晴れるのを覚えるのであつた。

そこに夕刊の新聞売が来たので三通りばかりの新聞を買ひ、もう半立リットル突の麦酒を取寄せて新聞を読むに、伊太利イタリーと希臘ギリシヤとが緊張した状態にあることを報じたその次に、*“Die Erdbebenkatastrophe in Japan”* と題して日本震災のことを報じてゐる。

新聞の報告は皆殆ど同一であつた。上海シャンハイ電報に拠ると、地震は九月一日の早朝に起り、東京横浜の住民は十万人死んだ。東京の砲兵工こうしやう廠は空中に舞上り、数千の職工が死んだ。熱海・伊東の町は全くなくなつた。富士山の頂が飛び、大島は海中に没した。云々である。

私は暫しばらく息を屏つめて是等これらの文句を読んだが、どうも現実の出来事のやうな気がしない。併し私は急いで其処そこを出いで、新しく間借

しようとする家へ行つた。部屋は綺麗に調へてあつたので私は牀しやうじやう

上うに新聞紙と座布団とを敷き尻をぺたりとおろした。それから二たび新聞の日本震災記事を読むに、これは容易ならぬことである。私の意識はやうやく家族の身上に移つて行つた。不安と驚きやうがくとが次第に私の心を領するやうになつて来る。私は眠薬を服してベツトの上に身を横よこへた。

暁になり南京虫に襲はれこの部屋も不幸にして私の居間と極きめることが出来なかつた。九月四日の朝、朝食もせず其処を出て日本媼のところへ急ぐ途中N君に会つた。N君も日本の事が心配で溜たまらぬのでやはり朝食もせずに日本媼のところへ来た途中なのであつた。N君の持つてゐるけふの朝刊新聞の記事を読むと、き

のふの夕刊よりも稍委しく出てる。コレア丸からの無線電報に
 抛るに、東京は既に戒嚴令が敷かれて戦時状態に入った。横浜の
 住民二十万は住む家なく食ふ食がない。ロイテル電報は報じて云
 東京は猛火に包まれ殆ど灰くわいじん 燼じんに歸してしまつた。紐ニュー育電
 報が報じて云。大統領 Coolidge 《クーリッジ》は日本の Mikado
 《ミカド》へ見舞の電報を打つた。それから能あたふかぎり日本の
 震災を救助する目的で直ちに旅順港にゐる米国分艦隊をして日本
 へ発航せしめた。また、上海投とうべう錨中の英国甲鉄艦 Despatch
 《デスパテチ》号も既に日本へ向つて出帆した。なほ、日本の
 地震はミュンヘンの地震計に感応し、朝の四時十一分頃から始ま
 り五時少し前に最も強く感応した。云々。

二人は近くの珈琲店カフェで簡単に朝食を済まし、日本媪のところに止宿してゐる二人の同胞と故郷のことを話合つた。私も部屋のことで斯かう愚図愚図してゐてはならぬと思ひ、けふも数軒部屋を見、遠くて不便であるが一間借りるやうに決心した。私はけふはもう教室に行く勇氣はなかつた。夕刊を読むと日本震災の惨害はますますひどい。私等は何事も手に附かず、夕食後三人して麦酒を飲みに行つた。酒の勢を借りてせめて不安の念を軽くしようとしたのであつた。

九月五日。日本の惨事は非常である。部屋の中に沈黙してゐても何事も手に附かない。九月六日。思切つて、Thorwalsen 《トールワルゼン》 St. 《シユトラセ》 六番地に引越してしまつた。こ

こには南京虫は居なかつた。教室まで遠くて不便であるが、日本の状態がこんなであつて見れば、私自身今後どう身を所決せねばならんか今のところ全く不明である。そこでせめて南京虫のゐない処に落付かうと決心したのであつた。

けふは、もう日本震災のための死者は五十万と註してあつた。

大小の消火山は二たび活動を始め、東京・横浜・深川・千住・横須賀・浅草・神田・本郷・下谷・熱海・御殿場・箱根は全く滅亡してしまつた。政府は一部京都一部大阪に移つた。東京は今なほくわえん火焔の海の中にある。首相も死に、大臣の数人も死んだ。ただ宮城の損害が比較的すくな少く避難民のために既に宮城を開放した。仏フ蘭西大使館、伊太利大使館は全く破壊した。帝室博物館、二大劇ランス

場、帝国大学、日本銀行、停車場等も廃滅に歸し、電報電信の途は全く杜絶とぜつしてしまつた。云々。

次の日も、次の日も、教室に行く気にはなれない。部屋に籠こもつて自分の所持品などを整理しようとしても直ぐ疲れた。併し飯めしくひに街頭に出ると、食レストラン店にゐる客などが態々わざわざ私のゐる卓ゆきすのところまで来て震災の見舞を云つた。ある時には、途中で行過ゆきすがつた背ルックサツク囊バックを負うた一人の老翁がまた戻つて来て、私を呼止めて見舞の言葉を云つて呉れたりした。日本からの直接通信が始めて英京倫ロンドン敦に届いたといふのが新聞に出たが、それを読むと前に読んだ間接通信の記事内容よりもつと深刻であつた。また民衆と軍隊との衝突があり、朝鮮人と軍隊との市街戦が報じられて

あり、新首相山本権兵衛子爵に対する暗殺企図、数名の大臣の死亡なども報じられてあり、五十万の人間と、五億ポンドの財産とが消失されたことを註してあつた。

さういふミュンヘン新聞の手がかり以外に、ベルリン伯林の友人からも何処どこからも何等事件の真相を知るべき手がかりが全く杜絶してしまつてゐる。夜はよく眠れず、あけ暁がたになつてとろとろとしたかと思ふとしきりに夢などを視みた。夢では、妻のやうな恰かつかう好を、妻か誰か分からぬ一人の女と、一人の童子とが畳のうへに坐つてゐる。それが向うを向いて居り、幾ら呼んでも依然として向うを向いてゐる。それで夢が醒めてしまつたりする。ある夜、ビール麦酒に酔つて歸つて来て寝た。さうするともうもうと火焰の靡なびいて

居る光景を夢に視たりした。私は或時には、東京の家族も友人も皆駄目だと観念したこともある。

或日、朝からN君を訪ねて、二人して当もなく街上を歩いた。

とある広場の古物商こぶつしやうに能の面が二つばかり並べてある。この古

物商には不思議にも日本物にほんものが並べてあるので、鎧よろひがあり、扇子

があり、漆器があり、花瓶があり、根付ねつけがあり、能衣裳のういしやうなども

ある。これは戦後に土地の人が売払つたものに相違ない。N君は

どう思つたか、齒を黒く染めた女の能面を一つ買った。二人は街

を歩いて行つてIsar《イーサル》川の橋を渡り、川原かはらに下りて行

つた。N君の家は東京の郊外にあるから、これはどうか損害を

蒙かうむらずにゐるらしい。併し親戚しんせき知己は幾人も東京の殷昌区いんしやう

域内に住んでゐる。それらの人々は到底駄目だらうといふことを話しあふ。二人は土手を上つて行つて黒麦酒ビールを飲んだ。酔つて幾らか鬱うつを散じてまた二人は川原の方に下りて行つた。川原には川柳の一めんに生えてゐるところがある。そこに五六の頑童の遊んでゐるけはひがしてゐたが、突如として、Chinese 《ヒネーゼ》
 一と叫んで柳のかげに隠れる。また、Chinese 《ヒネーゼ》一と叫ぶ。『ヒネーゼ！』と叫ぶのは軽蔑けいべつして調戲からかふつもりなのである。

N君はその能面をかぶり、川原で踊つた。能舞の様式を知つてゐるではなし、さればとて、Platzl 《プラッツル》で見るやうな、バヴァリア民間舞踊の恰好でもないが、日本震災のための不安動

揺の心理は、N君にそんなことをさせたのであつた。さうして逃げていつた童子等も其処そこに戻つて来て、笑ひころげてそれを見てゐる。そんなことなどもあつた。そして一日一日が暮れて行つた。通信は全く絶え、たまたま配達された故郷からの書信を読むと、極く平安事なきもので、何の役にも立たぬものである。私等は或日には日本飯を焚たいて食つた。それに生卵をかけ、大根などを買つて来てむさぼり食つたりしたのである。

日本の知人の顔などが時に眼前に浮んでくるが、その人々の中にはもう死んでゐるものもあるだらうといふ一種悲痛の心持が附帯してゐる。さういふ写象のうちには今どき小学校に通つてゐたはずの長男の顔なども浮んでくる。それから私みづからの近き未来

の運命のことなどが意識の上にのぼってくる。しまひにはさういふ意識のなかに自らひた涵つてしまつたせいであらうか、日本軍艦数隻が沈没し、伊豆いづの大島が滅して半島の近くに新しい島が出来、ハイリリーゲ神 聖 江の島が全く無くなつてしまつたといふ、さういふことなどは余り気にせぬやうになつた。

九月十日ごろN君のところに故郷の家族無事といふ電報が届いた。電文は『ヂシンヒドイブジ』としてあつた。なか二三日おいて十三日の夕がた私のところに、ベルリン伯林のM君から電報が届いた。電報は、*Folgendes Telegramm aus Japan erhalten* “Your family friends safe” = *Mayeda* へつてゐる。

家族も友人も無事といふ英文電報の方は、神戸から中村憲吉君

がやうやうの事で打つてくれたのが、伯林大使館に届き、毎日毎日情報を聞きに押懸けてゐた私の友の一人が沢山の電報の中から其を見付けてM君に知らせたから、M君は独逸文を少し附加して至急報で打つて呉れたのであつた。私は一人で麦酒ビールを飲みに行き、労働者等のわめきどよめく音声の側に、齒の鈍痛のやうやく薄らいだやうな気持で数時間ゐて帰つて来た。

翌日朝食の後、買物をした。教室で使ふ色素、靴墨、ナフタリン、石鹼、揮発油、靴下、針と糸などを買ひ、途中でトランク一つの代価たうを訊ねると娘店員が来て、zwei millarden dreimal hundert millionen Markと云つた。これは二十三億マルク麻克のことである。

次の日教室に行き教授に会つて大体日本地震の有様を報告し電

報のことをも話した。教授も助手も研究生も標本係の女も非常に喜んで呉れた。その日教授は私を自分の部屋に呼び、『もう率直にいいひますが、それでは研究費として毎月英国貨四磅ポンドづつ払つて下さい』と云つた。

それから私は教室の為事しごとをどうしても急がねばならぬと決心して、連日教室に通つた。九月の末といふに街路樹の葉が黄色になつて落ち、日本晩秋のやうな気持の時もあつた。独逸ドイツの状態がだんだん悪くなり、為替相場かはせも急転して下つた。九月廿七日には十四ばかり行はれる筈の国民党の集會が禁ぜられ、集會所や大きな啤酒ビール酒店をば軍隊と警官とで厳しく固めたこともあつた。〔Hofbra

三〕《ホーフブロイ》のやうなあんな盛さかんな麦酒店でもその三階

は十月半ばには既に閉鎖したほどであつた。

十月十四日にはじめて大阪毎日新聞九月三日の号外を手に入れ
皆頭を集めて読んだ、『東京全市焦土と化す』といふ大きな見出
しがあり、うすひたうげ碓氷峠から東京の空が赤く焦げてゐるのが見えると
も書いてある。これは想像よりもまだまだ悲惨である。十五日に

は大阪のO君から大阪朝日新聞の週報を受取り、廿一日には参謀
本部附のK少佐から大阪朝日新聞を借りて読んだ。深川の陸軍糧り
やうまつしやう秣もく廠ちやうの広場で何十万の人の死んだ所や、両国の橋の墜おちた

所などを讀んだ。どうも息がつまるやうである。三面の方には、
佐渡まで帰らうとしてやうやく長野市の停車場まで落延びて来た
ひとりの女を見るに、自分の髪の毛が全く焼け焦げ背には焼死ん

だ子を一人負つてゐるといふ記事などもあつた。

そのうち東京の家から手紙があつて、しきりに帰国を要求して来てゐた。ミュンヘンも追々寒くなり町には毎日霧がかかるやうになつた。Hiler 《ヒツトレル》 事件といふのもその間にあつた。独逸の絵入新聞にも、死骸が山のやうに積まれてある日本震災の惨状が載るやうになり、或時には吉原よしはらで焼死んだ遊女の死骸を三列ばかりにして並べて、そこに警官がひとり立つてゐる写真を載せ、これは本国の日本で既に発表禁止になつたものだと言つたことなどもある。さうして日一日と暮らしてゐる間に私は決断して当分ミュンヘンに止まらうと思ひ、東京の親しい友に金を借ることを頼んだりした。

十二月十三日になつて、「大正大震災大火災」といふ雑誌を借り、真に身ぶるひするやうな大地震の有様を読んだ。その中に幸田露伴翁の談話があつたが、私はその中の一二節をば手帳に書取つた。

○そこで一言を人々に贈らうと思ふ。おもへば言葉は甲斐無いものである。千百の言葉は一団の飯にも及ばず、びびげん 々の言は滴てきて々きみづの水にも如しかぬ場合である。けれども今の自分の此の言葉は

言葉とのみではない。直ちに是自分の心である。○そこでたとひ仮令美酒蘭燈の間にゐて歌舞歓楽に一時の自分を慰めてゐても、何処かにこれを是認せぬものがある。つまり心が一つでなくて、二つになつてゐる。人といふものは二氣あれば即ち病む、といふ古い支

那ことわざの諺ことわざにある通り中略宜しく胆たんを張り氣きを壯さかんにし、飲食を適宜にし、運動を怠らずして、無所畏心むしよあしんに安住すべきである。○宗教上の信仰を有する人は、かかる時こそ宗教の加護を受くべきである。観音の額には無所畏むしよあの三字が示してあるではないか。不動尊は不動經に、我は衆生しゅじやう心中しんちゆうに住すと説いてあるではないか。中略神仏に人ををののかすものはない。皆各其大威力そのだいありよくたいじ大慈力りきによりて人々に無所畏むしよあを得しむるものである。まして無神無仏の徒とは既に神を無なみし仏を無みするだけの偉いものであるから、夢にも恐怖心などに囚はれてはならぬ。云々。

私は実に久しぶりで翁の言に接したのである。そして独逸語で頭を痛めてゐるときに、是等これらの言葉はすらすらと私の心に這入はひつ

て来た、のみならず翁の持つ一つの語気が少年以来の私に或る親しみを持たせるのであつた。カアル・マルクスの『宗教は国民の阿片^{あへん}である』(Religion ist das Opium des Volks.)と云ふ西暦一八四四年の言葉が、西暦一九一七年の露国革命の際に、彼のグレコが聖母の像と相對した壁面上に書かれたといふ。これは莫斯科^{モスカウ}の出来事で、レニンなどが主になつてああいふことをやつた。レニンは、" [Die Religion ist Opium für das Volk.] "と書いて、さて、宗教といふものは下等なフーゼル酒^{しゅ}のやうなものだ。資本の奴隷どもは、漸^{やうや}く真人間の仲間入をしようとする権利を得ながら、半途にしてこの宗教といふ下等な火酒^{くわしゅ}の中に溺^{できぼつ}没してしまふのである。とさへ罵^{のの}つてゐる。近ごろ讀んだああいふレニンの言

葉くらに較べると、『無神無仏の徒は既に神を無みし仏を無みするだけ』云々といふ幸田露伴翁の言葉には、少しもそこに反語がないところに露伴の面目がある。レニンのものの如くに、『streitba
ム』とか、『[revolutionar]』とか謂いふ臭気がまつはつてゐない。

そんな事を私は一人ゐながら思つた。レニンの病氣もその後悪いさうだが、追つかけ死ぬだらう。臨終の近くに誰かがどういふ言葉かを掛けるだらう。それが所詮しよせん、希臘ギリシヤ加特利教カトリックの儀式の代弁ならつまらぬなども私は思つた。

十二月十四日に宿かみの上さんに転宿かみのことを話し、翌十五日に日本ほんおうな媼おんなのところこまに引越して来た。その晩に将棋を差したが、駒こまも盤も大戦前の留學生が置いて行つたものである。戦時中、老媼の

一家がいまのところに引越して来たにも拘^{かか}はらず将棋の如き、かういふ品物をも無くさずに持つてゐたのであつた。

大正三年に大戦が勃^{ぼつ}発^{ぱつ}し、留学生どもは逃げたのであるが、大正十一年の一月に私が伯^{ベル}林^{リン}に著いてミュンヘンの事情をさぐると当時ミュンヘンは唯ひとりの日本人が特別の許可を得て研究してゐるに過ぎず、ここへの入国は嚴重で出来なかつたのである。その七八年の間将棋の駒を無くさずにゐたのは私にはおもしろい。私はここに寄寓^{きぐう}しておのづと大地震に対する驚^{きやう}愕^{がく}の念を静めて行かうと思つたのであつた。

青空文庫情報

底本：「斎藤茂吉選集 第九卷 随筆」岩波書店

1981（昭和56）年2月27日 第1刷発行

初出：「改造」

1929（昭和4）年10月

入力：しだひろし

校正：門田裕志

2012年4月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

日本大地震

斎藤茂吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>